

## 2004年度 別科自己点検・評価報告書

### A 1 大学・学部等の理念・目的・教育目標とそれに伴う人材育成等の目的の適切性

#### 1. 現状の説明

- ①創価大学は「建学の精神」として「人間教育の最高学府たれ」「新しき大文化建設の揺籃たれ」「人類の平和を守るフォートレス（要塞）たれ」との3つを掲げて人材育成に努めている。別科では、このうち特に“人間教育”と“平和”の「建学の精神」を踏まえ、人間教育に基づく多文化共生、相互理解の精神を通して世界の平和に貢献する国際人の育成を目指している。
- ②本学別科は、日中国交正常化まもない1975年、本学創立者である池田大作先生が日中両国の友好を願い、自ら保証人となって日本で初の中国からの留学生を受け入れ、日本語教育を行ったところにその源を発している。現在、学部・大学院に入学を希望する私費留学生に日本語・日本事情を教授する「日本語研修課程」（予備課程：定員35名）と、本学との交換協定に則り来学する交換留学生の受け入れ、および日本語教授を目的とする「日本語特別課程」（交換留学生コース：定員65名）の2つのコースを運営している。
- ③2003年度秋学期から創立者を同じくするアメリカ創価大学の「スタディーアブロード・プログラム」による日本語研修生の受け入れが始まり、大学間交流がさらに拡大した。

#### 2. 点検・評価 長所と問題点

- ①別科の授業は少人数のクラス（20名程度）で運営されており、世界各地からの多様な文化をもった留学生が出会い、共に生活し、互いを認め合う‘人間教育’の場になっている。その中で留学生は多文化共生、相互理解の精神を身につけ、建学精神を体する世界市民へと育っている。
- ②別科生は、寮生活やクラブ、留学生会、大学祭等の活動を通して、また折々の創立者のスピーチや学生への温かな配慮を通して、「建学の精神」が実感できる好環境にある。
- ③「建学の精神」に賛同して入学を希望する私費留学生の中には進学を目的としない者もいる。また在外日本人の子弟や日系の学生もおり、ニーズも多様化している。こう

したニーズに応えることも考慮しなければならない。

### 3. 将来の改善・改革に向けた方策

- ①「建学の精神」に則り、全学的に更にきめ細やかな留学生教育を推進するとともに、精神面・生活面の支援を行うために、2002年に「留学生教育支援委員会」が設置され、万全の支援体制が整いつつある。

## B 1 大学・学部等の理念・目的・教育目標とその目的の達成状況

### 1. 現状の説明

- ①創設以来29年、別科は平和貢献の人材を数多く輩出している。具体的には帰国後、自国の政府機関、教育・研究機関、また実業界等で活躍している修了生が多い。別科修了後も留学生はお互いに連絡を取り合い、同窓会等の折には母校を再訪して種々近況報告をするなど、活発な交流が続いている。また在学中は兄姉のように後輩の面倒を見たり、帰国後には後輩を本学に紹介するなど、建学の精神を具現化し、世界で活躍している。
- ②日本語研修課程(予備課程)を修了した別科生が学部卒業時に「創立者賞」、「創価大学貢献賞」を受賞するなど、学部・大学院での別科修了生に対する評価は高い。別科の修了生の中には、本学あるいは他大学で学位を取得し、本学に戻り、教員として教鞭を執り後輩の育成に努める者も出て、建学の精神の具現化に貢献している。また途上国でNGO活動に携わる者や、外交官として活躍する者もいる。

### 2. 点検・評価 長所と問題点

- ①建学の精神を体し、世界市民として活躍する人材を多数輩出している。

### 3. 将来の改善・改革に向けた方策

- ①交換留学生に関して、日本語教育だけでなく、学生のニーズに合った学習・研究の場が提供できるよう、全学的な取り組みをさらに推進する必要がある。
- ②建学の精神を後輩に伝えるため、社会で活躍している本学卒業生と別科生との交流の場を設置する必要がある。

## B 12 全授業科目中、専任教員が担当する授業科目とその割合

### 1. 現状の説明

①別科の授業科目は、日本語科目と日本事情科目に分かれるが、日本語科目については7名の別科専任教員がその5割以上を担当している。詳細は下の表の通りである。日本事情科目は、学部兼担の教員や学外から特別講師（日本文化体験）に依頼することもある。

注) \*1 春学期は日本語科目で代替することが多い

\*2 うち1名は2004年度秋学期に在外研究

		2004年度 春学期				2004年度 秋学期					
		日本語科目 (45分)		日本事情科目 (90分)		日本語科目 (45分)		日本事情科目 (90分)			
		課程	研修	特別	研修	特別	研修	特別	研修	特別	
		コマ数	72	78	6	—		72	104	2	—
別科	専任	7人	37	46	5*1		7人*2	45	55		
			51.4%	59.0%				62.5%	52.9%		
別科	非常勤	7人	35	32	1	2	7人	27	49		2
			48.6%	41.0%				37.5%	47.1%		
学部	兼担						6人			6	

### 2. 点検・評価 長所と問題点

- ①別科専任教員は全員が日本語科目を教え、クラス・コーディネータとして授業計画から評価までのすべてを担い、ほぼ毎日非常勤講師（兼任教員）と顔を合わせて緊密な連携をとって進度やシラバス調整を図っているため、留学生に対する非常にきめ細やかな指導及び幅広い角度からの留学生教育が可能になっている。
- ②交流協定の拡大により「特別課程」の受け入れ留学生数が増加し、教員一人あたりの学生数も増加の傾向にある。また教員の在外研究や研究休暇のため学期によってはクラス・コーディネータが複数のクラスを担当することがある。

### 3. 将来の改善・改革に向けた方策

- ①クラス・コーディネータの増員が望まれる。

## **B 13 兼任教員等の教育課程への関与の状況**

### **1. 現状の説明**

- ①別科では、日本事情科目として学部専任教員（兼任）が別科の授業を担当し、進学及び学部入学後に必要な各専門の基礎知識を教授し、大学院進学希望者には研究計画等に対する助言などを行い、手厚いサポートがある。

### **2. 点検・評価 長所と問題点**

- ①現在はクラス・コーディネータと兼任教員と緊密な連携を心がけているが、これまで兼任教員に対して留学生一人ひとりの日本語のレベルを十分伝えることができず、兼任教員が留学生の日本語のレベルを考えずに授業を進めるということがあった。

### **3. 将来の改善・改革に向けた方策**

- ①年度により担当が変わる兼任教員に別科のシステムを十分に理解してもらう努力を常に行う必要がある。このため、春学期の別科運営委員会で、学部の兼任の教員には、留学生一人ひとりの状況について把握できるような情報を提供することにした。

## **B群 国内外の大学等と単位互換を行っている大学にあっては、実施している単位互換方法の適切性**

### **1. 現状の説明**

①別科における単位互換は、交換留学生のみに適用され、各交流大学との間で締結した交流協定に基づき、派遣元大学から要望がある場合に限り行われる。

これまで交換留学生の来日時期が前後したため、遅れて来日した学生のプレイスメント・テストや履修登録、授業時間などを確保することが難しかった。2004年度から、交流大学を通じて各々の交換留学生に、到着日を合わせることを事前に徹底して、問題をほぼ改善することができた。

### **2. 点検・評価 長所と問題点**

①単位認定については、成績証明書に講義内容、授業時間数、使用教材などに関する報告を添付しており、現在まで派遣元大学において問題なく単位の認定が行われている。

②学部科目の成績が3、9月に発行されるため、帰国日によっては単位認定に係わる書類が手渡せないことがある。この場合は各学生の母国の住所宛に郵送している。

③「特別課程」の科目名や単位認定については、「日本語研修課程」に準じてほぼ一律に行ってきた。しかし、交流大学の増加と多様化により、単位認定についても様々な要望が寄せられている。例えば、科目ごとの単位認定がある一方で、受講時間数による一括認定が行われるなど、単位互換・認定などの方法が各々の大学で異なっている。

### **3. 将来の改善・改革に向けた方策**

①本学では、交換留学生が帰国後にスムーズに単位認定が受けられるように、開設科目の科目名を変更するとともに、教材・シラバス・授業時間などを交流大学に送付して改善を図った。単位互換については、今後とも派遣元大学とのさらなる緊密な連携が求められる。

## **C群 海外の大学との学生交流協定の締結状況とそのカリキュラム上の位置づけ**

### **1. 現状の説明**

①別科学則に則り、「日本語特別課程」に交換留学生を別科生として受け入れ、日本語教育を中心とした独自のカリキュラムを提供している。

②本学は2005年3月現在、世界42か国・地域の91大学と学術交流協定を締結しているが、近年の受け入れ実績は次の(表1)の通りである。

(表1) '81~'05年3月の大学別交換留学生修了生数

<b>アジア</b>		弘益大学	4	<b>ヨーロッパ・ロシア</b>	
香港中文大学	67	済州大学	2	モスクワ大学	83
香港大学	14			レニングラード大学	2
マカオ大学	23	<b>北米・中南米</b>		ロシア極東大学	19
タマサート大学	17	デラウエア大学	9	ボローニャ大学	25
チュラロンコン大学	5	チャールストン大学	1	アドバンシア	27
トリブバン大学	11	テキサス・テック大学	2	ソフィア大学	21
デリー大学	7	アリゾナ大学	19	バルセロナ大学	8
フィリピン大学	13	モントリオール大学	6	クラーゲンフルト大学	1
インドネシア大学	8	グァナファト大学	22	ルンド大学	2
モンゴル国立大学	4	デル・バーリエ大学	8	ポール・バレリー大学	1
ケラニヤ大学	5	コルドバ大学	1		
デ・ラサール大学	3	パラナ連邦大学	8	<b>中近東・アフリカ</b>	
マラヤ大学	13	パレルモ大学	1	アンカラ大学	13
台湾大学	9	サンチャゴ大学	1	ヘブライ大学	4
中国文化大学	16	サンパウロ大学	8	ウィットウォーターズランド大学	13
中山大学	5	ブエノスアイレス大学	1		
慶熙大学	9	ハバナ大学	12		
昌原大学	6	アメリカ創価大学	35		

## 2. 点検・評価 長所と問題点

- ①学則により、私費留学生とともに交換留学生を別科で一元化して受け入れていることは、留学生の学習・生活面、行事など様々な配慮をする上で利点がある。
- ②交換留学生の中には日本語学習を必要としない学生もあり、学生の専門に応じて学部・大学院に指導を依頼することがある。

## 3. 将来の改善・改革に向けた方策

- ①交換留学生の別科での日本語学習を中心とした一元的な受け入れだけでなく、各々の留学生の専門性を重視した学部や大学院等での受け入れを検討する必要がある。
- ②本学では、来日前に日本語能力試験1級に合格した学生など、日本語能力の高い学生

には各学生の専門により学部科目を受講させ、単位を修得して互換する「特別履修生」の制度を設けている。

- ③現状では、日本語の応用力をつけることを目的として、教養・基礎的な科目を履修する学生が多い。近年、多様な交換留学生を受け入れる中で、より高度な専門性を身につけるために学部科目3・4年次の科目を選択し、単位の修得・互換を望む学生もあり、教務課、科目担当の教員との緊密な連携をはかっている。

## **B 15 教育上の効果を測定するための方法の適切性**

### **1. 現状の説明**

- ①別科では、少人数教育の特性を活かし、毎日の授業を重視し、双方向の授業を行うことで、常に学習者の進捗状況を測定し、学習効果を確認している。
- ②春秋の両学期とも、中間試験並びに期末試験を実施し、学習者の理解度を測定している。
- ③毎週、復習試験を行い、前週の教育効果を確認し、学生にフィードバックしている。
- ④月1回、漢字能力認定試験を行い、自発的な学習を促している。
- ⑤ペーパー・テストだけではなく、ディベート、スピーチなど口頭による日本語運用力の測定も行っている。

### **2. 点検・評価 長所と問題点**

- ①日々の授業を中心に、さまざまな方法で教育効果を測定し、学生の学習状況を的確に把握し、毎週のシラバスに反映させている。学生一人ひとりに合った助言、補講などを行っている。
- ②クラスのサイズが徐々に大きくなり、きめ細かな教育・評価を維持していくため、クラス・コーディネータの学生一人ひとりに割く時間が増加している。

### **3. 将来の改善・改革に向けた方策**

- ①少人数教育を維持できるよう、クラス編成及びクラス・コーディネータの育成を考えていかなければならない。

## **B 16 教育効果や目標達成及びそれらの測定方法に対する教員間の合意の確立状況**

### **1. 現状の説明**

- ①毎週の専任教員による会議開催や日常的なクラス・コーディネータを中心とした各科目担当者との情報交換を行っている。
- ②試験問題作成にあたっては、各コーディネータが各担当者と協議し、協力して作成しており、測定方法の客観性を保つよう、努めている。
- ③試験結果についても同様に、コーディネータと各担当者が協議し、その問題点の解決に努めている。

## **2. 点検・評価 長所と問題点**

- ①教員間では、日常的に相互に情報交換を行い、授業内容・シラバス・評価法等について十分に合意が確立されている。
- ②成績評価に客観性を持たせるために、学期毎に判定会議を開催している。
- ③教員間の情報交換には、多くの時間を要するが、効果は大きく、現在これに変わるものは見あたらない。

## **3. 将来の改善・改革に向けた方策**

- ①教員間で、語学運用力についての評価法等に関する研究を更に進めることが求められる。

## **B17 教育効果を測定するシステム全体の機能的有効性を検証する仕組みの導入状況**

### **1. 現状の説明**

- ①クラスのコーディネータは各時間のシラバスを毎週作成し、授業はそれに基づき、教育効果の測定を行っている。
- ②クラスのコーディネータは授業担当教員と緊密な連携を取り、学習の進捗状況を点検し、シラバスに反映させている。
- ③別科の成績評価だけではなく、公的試験（日本語能力試験や日本留学試験等）の結果を教育効果の測定の客観性を高める一つとして活用している。
- ④日本語研修課程（予備課程）では、学部進学者に対し、学部での成績の追跡調査を行い、予備課程における基礎教育の有効性を検証している。

### **2. 点検・評価 長所と問題点**

- ①別科の授業は教育効果の有効性を求められており、常に検証している。別科を修了できない学生や学部進学後、学業不振に陥る学生は稀である。



②問題は特になし。

### 3. 将来の改善・改革に向けた方策

①上述のとおり、現状の仕組みは機能的有効性を検証するものとなっている。

## B18 卒業生の進路状況

### 1. 現状と説明

①日本語研修課程（予備課程）の修了生は、ほとんどが本学学部・大学院へ進学する。また、専門学校、他大学の学部・大学院へ進学する者もいる。さらに、進学を目的とせず、本学の建学精神に共鳴し、別科に入学する学生もいるが、これらの学生は修了後、帰国するかあるいは日本で就職するケースが多い。（表1参照）

②日本語特別課程の学生については、滞在期間終了後、派遣元大学へ復学する。中には文部科学省等の給費留学生として再来日する学生もいる。また、卒業後は、自国の政府機関や日系企業、さらには日本語教師として活躍する者も多い。

（表1）予備課程における年度別進路状況

年度	進学	就職	帰国	その他 (研究生等)	合計
2000年度	23	1	12	1	37
2001年度	25	0	9	0	34
2002年度	26	2	6	2	36
2003年度	30	2	6	2	40
2004年度	26	1	5	2	34

### 2. 点検・評価 長所と問題点

①例年、「日本語研修課程」に在籍する別科生の7割以上が学部・大学院へ進学しており、別科は十分にその課程の役割を果たしている。

②別科生が1年間の課程を経ることにより、各学生の勉学、生活、経済など様々な状況が把握でき、学部・大学院へ進学後の問題は非常に少ない。

③留学生の希望する学部が偏ることがあり、時には留学生の希望に十分に添えないことがある。

④留学生の英語力の不足が進学の支障になることがある。

### 3. 将来の改善・改革に向けた方策

- ①本学の学部による受入枠の拡大が望まれる。
- ②明年度(2005年度)より別科生に I T P テストを課し、英語力向上の環境を整えることにした。

## **A 6 履修科目登録の上限設定と、その運用の適切性**

### **1. 現状の説明**

- ①別科での科目は必修と選択必修がほとんどであるので、履修科目登録の上限設定はない。
- ②交換留学生に関しては、十分な日本語能力を有する上級クラスの学生にのみ、学部の聴講を一部許可し、特別履修生として学部科目の登録を認めている。特別履修生の学部聴講については10科目までの上限設定がある。

### **2. 点検・評価 長所と問題点**

- ①別科で必修科目と選択必修科目が決められていることは、語学学习上効果的である。また交換留学生について、特別履修生の10科目の制限は現時点では適切である。

### **3. 将来の改善・改革に向けた方策**

- ①別科として履修科目登録の上限を設定していない現状については、特に改革の必要性は認められない。

## **A 7 成績評価法、成績評価基準の適切性**

### **1. 現状の説明**

- ①各学期2回の定期試験及び毎週の試験と授業内の小テストの結果、提出物、平素のクラス活動及び出席状況によって成績を評価している。また別科では出席率80%以上を修了の要件としている。
- ②クラス毎の成績評価は相対評価を基本としているが、クラス間のレベル差を考慮して、絶対評価を加味している。
- ③評価はⒶ、A、B、C、Dの五段階で行っている。

### **2. 点検・評価 長所と問題点**

- ①定期試験だけでなく、様々な成績評価法を採用していることは、総合的かつ適切に成績を評価する上で極めて効果的である。

### 3. 将来の改善・改革に向けた方策

①科目内容によっては、SU評価の導入を検討する必要がある。

#### B19 厳格な成績評価を行う仕組みの導入状況

##### 1. 現状の説明

①別科では進度別の少人数のクラス編成を行い、各クラスにコーディネータを置き、コーディネータを中心に、そのクラスの科目担当者の意見を聞き、全員で検討して成績評価を行っている。

②定期試験の結果だけでなく、毎週の試験や小テストの結果、提出物、平素のクラス活動及び出席状況を考慮して、厳格な成績評価を行っている。

##### 2. 点検・評価 長所と問題点

①担当教員全員の協議によって、学生の成績をより客観的かつ厳正に評価していることは、厳格な成績評価を行う上で非常に効果的であり、現時点で問題点はない。

### 3. 将来の改善・改革に向けた方策

①特に改善の必要はない。

#### B20 各年次及び卒業時の学生の質を検証・確保するための方途の適切性

##### 1. 現状の説明

①別科の入学選考時において、経験を積んだ教員が厳格に中等教育段階での成績を検討し、学生の質を確保するための努力を行っている。

②教員が学生に各クラスの修了時の学習到達目標を明確に示し、各学生がその目標に到達するよう種々指導を行っている。進度の遅れている学生に対しては補講等の措置をとり、学生の学習目標に到達させる努力をしている。

③修了時の学生の質を確保するために、日本留学試験、日本語能力検定試験等の外部作成の試験や、別科で作成した全クラス共通の実力試験等を実施している。また、別科独自に作成した漢字能力試験を定期的の実施する等、学生の質について常に検証し、各クラスの到達度を明確にして、年度による差を少なくする努力をしている。

##### 2. 点検・評価 長所と問題点

①クラスによる学習到達目標が明確になっているので、教員と学習者双方の努力が効果

的に行われている。少人数クラスで、各コーディネータが個々の学生の学習到達度を細かく検討していることは、学生の質を確保する上で十分効果をあげている。

- ②世界の経済・社会状況により志願者数が変動し、学生の質が必ずしも一定していないため、学習到達目標を達成させるのに努力を要する年もある。

### 3. 将来の改善・改革に向けた方策

- ①入学者の全体的な質の変動にかかわらず、修了時に一定の質を確保することは、困難な課題であるが、教材の工夫、シラバスの調整、宿題、個別指導などを行うことによって、改善を図るとともに、新たな方策を模索中である。

## A 9 学生の学習の活性化と教員の教育指導方法の改善を促進するための措置とその有効性

### 1. 現状の説明

- ①別科では1クラス15名前後による少人数のレベル別授業運営を基本としている。
- ②各クラスにはコーディネータを配置している。クラス・コーディネータは学生の能力に応じたシラバスを作成し、授業を実施している。
- ③毎週の試験、日々の小テストなどで学習進度を確認するとともに、遅れの見られる学生に対しては個別指導や補講を実施している。
- ④日本語能力が高い学生は交換留学生を中心に学部科目の聴講もできるようにしている。
- ⑤進路に応じて必要な助言を行ったり、学部や大学院の教員に指導やアドバイスを依頼したりしている。
- ⑥漢字能力の向上のために独自の漢字能力試験を開発し、毎月実施することによって、学生が自分なりのペースで漢字学習を進めることができるようにしている。
- ⑦弁論大会やディベートを行って自分の意見を日本語で発表する機会を設けたり、プロジェクト・ワークを通じて積極的に日本語を運用させる取り組みを行っている。
- ⑧教材研究会議を開いて指導法の検討、教材開発、指導マニュアル作成などを行っている。
- ⑨別科ではチーム・ティーチングを行っているため、日常的に教員は専任、兼任（非常勤）教員を問わず連携を取りながら、学生の学習上の問題点や授業の問題点について情報交換や協議を行い、授業改善に取り組むと共にシラバスの変更なども行っている。

### 2. 点検・評価 長所と問題点

- ①別科では各クラスにコーディネータを置き、学生にきめ細かい指導を行っている。これは学生にとっては非常に好ましいことであり、それなりの成果を出しているが、その一方でコーディネータ制は教員にとっては責任が重い。
- ②漢字能力試験は漢字学習の大きな目標となり、学習意欲を引き出すのに役立っている。
- ③インタビューやプロジェクト・ワーク、弁論大会、学習発表会等は、学習成果を発揮するよい機会となっている。
- ④日本語能力の高い学生は学部聴講ができる特別履修制度を設けているが、留学生が望む科目を履修できないことがある。
- ⑤留学生教育支援委員会が設置されたことによって、留学生教育の諸問題について学部教員と意見交換する場ができたことは、一歩前進である。しかしながら、まだ十分に留学生に対する教育内容の検討を行うまでには至っていない。
- ⑥学部聴講は学生のニーズに応えるのに役立っていると思われるが、これが多くなると、別科の教員が留学生の学習や生活を十分に把握できなくなる。出席状況の芳しくない留学生については担当教員に国際課への報告を依頼してあるが、さらなる徹底が求められる。

### 3. 将来の改善・改革に向けた方策

- ①現在実施している研修旅行、社会見学、体験的授業の内容の充実、クラブ活動への参加促進、日本人家庭の訪問機会の拡大、さらには、学生のニーズによるオプション・ツアーの実施など、授業以外での学習活動を展開していくことが考えられる。
- ②教育環境の悪化を招くことがないように、少人数クラスの維持が求められる。
- ③日本語教授能力をより充実・向上させるために、別科内で教員相互の研修体制を作る必要がある。
- ④高度な専門知識を求める交換留学生の要望に応えるため、現行の特別履修制度を見直し、学部のゼミへの参加を認める、新科目を開講する、などの対策が求められる。

## A 10 シラバスの適切性

### 1. 現状の説明

- ①別科では授業を開始する前にはプレイズメント・テストを実施し、文法力・語彙力・聴解力・表現力などから総合的に判断してクラス分けを行い、各クラスのコーディネ

ータが学生のレベルに合わせて毎年シラバスに修正を加え、学習進度を調整している。

- ②市販の教材で不足していると思われる部分は、学生のニーズや要望に応えられるよう独自教材の開発に取り組んでいる。

## 2. 点検・評価 長所と問題点

- ①学生のレベルやニーズに合わせて進度や学習内容を調整していることは、学習効果を高める上で役立っていると思われる。
- ②日本語習得を第一目的としない交換留学生のための授業が現状では限られている。
- ③日々の小テストや毎週のテスト、定期試験の作題、及び独自教材の開発など、学生のレベルにあわせたシラバス作成を心がけている。

## 3. 将来の改善・改革に向けた方策

- ①可能なら非常勤講師（兼任教員）を増員することでコーディネータの授業時間数を減らし、個々の学生に対応する個別指導の時間を確保することが望ましい。
- ②学部の協力を得て、交換留学生の多様な目的や関心に対応した新科目の設置を検討していく必要がある。

## B 23 F D活動に対する組織的取り組み状況の適切性

### 1. 現状の説明

- ①別科ではチーム・ティーチングを行っているため、日常的に教員は専任、兼任（非常勤）教員を問わず十分に連携を取っている。
- ②学生の学習上の問題点や授業の問題点について情報交換や協議を行い、授業改善に取り組むと共にシラバスの変更なども行っている。
- ③大学が開催する研究会や研究授業にも積極的に参加するようにしている。

### 2. 点検・評価 長所と問題点

- ①教員間の連携が密なので、トータルな形の日本語教育を目指すことができる。
- ②大学の「教育・学習活動支援センター」が開催する研究会は学部生に対する教育が主であり、留学生教育にあまり応用できないものが多い。
- ③コーディネータが作成したシラバスに基づいて授業を実施し、テストを頻繁に行っているため、教育効果がすぐに数字となって現れるので、それがF D活動につながっている。

④専任教員は全員コーディネータを務めているので、長期の休暇以外には十分な研修や研究活動が行えない。

### 3. 将来の改善・改革に向けた方策

- ① 研究授業や研究会の定期的な実施が有効であろう。
- ② 留学生教育という特殊性もあるので、学部主催のFD研究会に参加するだけでなく、別科として独自の組織的なFD活動のあり方について検討する必要がある。
- ③ 中級用指導マニュアルの作成をし、中上級の指導改善を図りたい。

## B24 学生による授業評価の導入状況

### 1. 現状の説明

- ①各コーディネータは学生とほとんど毎日会っており、常に十分なコミュニケーションをとり、学習面はもとより生活面に至るまで意見や要望を汲み取る努力をしている。
- ②留学生が率直に意見や要望を言える環境を提供している。
- ③学部で作成した授業評価アンケートを実施したことがある。
- ④日本語教育では同じ教科書で複数の教師が授業を行っているので、科目ごとの評価というのは難しい。そのため、別科の授業内容・運営など全体に対するアンケートという形で学生の感想、意見、不満などを聞いている。
- ⑤修了や帰国に際してアンケートを実施し、留学生の感想、意見・要望などを聞き、授業方法や授業内容に反映している。

### 2. 点検・評価 長所と問題点

- ①前項のような環境を提供しているので、教員と学生の距離の近さは、学生のニーズや不満、授業に対する評価を知る上で効果的であり、「授業アンケート」という形式をとる必要がないと考えている。

### 3. 将来の改善・改革に向けた方策

- ①日本語教育用の授業評価方法、チーム・ティーチング用の評価方法については今後検討する必要があると考えている。

## C 4 FDの継続的实施を図る方途の適切性

### 1. 現状の説明

- ①授業中の学生の反応、毎週の試験結果や日々の宿題等から授業に問題があると思われる場合は、その都度教員同士お互いに指摘したり、話し合ったりすることによって改善を図っている。
- ②別科の教育は日々成果を問われるものであり、毎日がFD活動とも言えるものである。

## **2. 点検・評価 長所と問題点**

- ①1.の①②より、FDは総括的に実施されていると考える。

## **3. 将来の改善・改革に向けた方策**

- ①日本語教育の新たな視点、新たな方法論を取り入れていくことで、より一層の教育環境の充実を図ることができよう。
- ②外部講師を招いて研究会を開いたり、積極的に他の日本語教育機関との交流を促進するなどの取り組みが望ましい。



## **B 25 授業形態と授業方法の適切性、妥当性とその教育指導上の有効性**

### **1. 現状の説明**

- ①別科では1クラス15名前後による少人数授業を基本とし、各クラスにコーディネータを置いてクラスごとにシラバスを組んで授業運営をしている。
- ②日本語研修課程(予備課程)は進学目的ということで、どうしても詰め込みにならざるを得ない面があるが、日本語特別課程(交換留学生コース)は日本文化の体験授業を取り入れたり、社会見学を増やしたりするなど、座学以外の学習環境整備に取り組んでいる。

### **2. 点検・評価 長所と問題点**

- ①少人数のレベル別クラスは日本語学習の効果を高める上で、非常に有効に機能していると思われる。
- ②近年の交換留学生数の増加によって、従来と比べて細かいところまで指導の手が行き届かなくなっている。
- ③日本語を主たる目的としない交換留学生は、別科内での対応では限界がある。

### **3. 将来の改善・改革に向けた方策**

- ①ティーチング・アシスタント制や日本語ボランティア制などを作り、学生指導を充実させつつ、日本人学生との交流の場を提供する方策が求められる。
- ②今後は日本語学習を主たる目的としない交換留学生のために、学部の協力を得て英語やスペイン語などによる教育プログラムの拡充をはかることが求められる。
- ④ 交換留学生に対して、各コーディネータが個人的に学生のニーズに応じた社会見学などのサービスを行ってきたが、制度としてオプション・ツアーや見学会などを開催することが望ましい。

## **B 26 マルチメディアを活用した教育の導入状況とその運用の適切性**

### **1. 現状の説明**

- ①視聴覚教育の充実を図るために、カセット・テープ、ビデオ・テープ、レーザー・ディスク、DVD、OHP等々市販および自作の教材を活用している。
- ②独自の視聴覚教材の開発に積極的に取り組んでいる。
- ③ノートパソコンと学内無線LANによってインターネットやパワーポイントなどを利

用した学習もできるようになった。

## **2. 点検・評価 長所と問題点**

- ①単なる日本留学試験や日本語能力試験対策ではなく、実生活や大学での聴講を意識した視聴覚教育や表現教育に取り組んでおり、かなり充実していると言える。
- ②別科のA V施設が老朽化しており、最新のC A L Lを利用できる環境にない。

## **3. 将来の改善・改革に向けた方策**

- ①別科のA V教室のできるだけ速やかな設備更新が望まれる。
- ②移動式のプロジェクター1台では、使用に限界がある。各教室に設置し、A V教室以外でもマルチメディアが活用できる環境を作っていく必要がある。
- ③教員がマルチメディアに対する意識を高め、活用できる技術を身につけていくことが求められる。
- ④教員がマルチメディアを授業で活用できるようにするための技術サポート体制の整備が望まれる。